

# 生鮮ぶどうの輸入増加と国内消費

研究員 福田彩乃

主に生食に仕向けられる生鮮ぶどうの輸入量は、ここ数年で急増している。海外産地の動向に詳しい青果物専門の輸入商社への聞き取り等に基づいて、輸入増加の要因を消費動向に注目して分析する。

## 1 オーストラリア産とアメリカ産の輸入増加

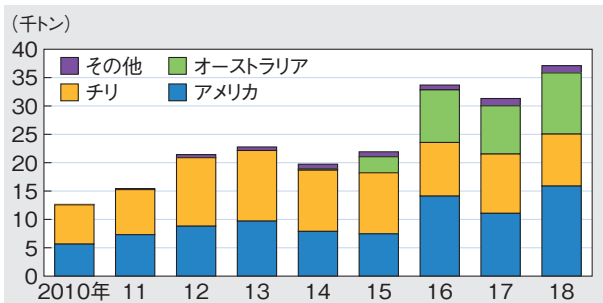
2018年の生鮮ぶどうの輸入量は37千トンで、国内生産量(162千トン)の2割に相当する。輸入が大きく増加したのは16年からで、オーストラリア産とアメリカ産の伸長によるもの

である(第1図)。

オーストラリア産はこれまで輸入禁止であったが、14年に一部の品種を条件付きで解禁したことが増加要因となっている。

一方、アメリカでは高収量で種無し大粒の新品種への作付転換が進んでおり、そうした品種が簡便性を重視する国内消費者に受け入れられたことが一因とみられる。日本向け輸出が盛んなカルフォルニア州では、米国農務省の農業研究局(ARS)が作出した新品種の「スカーレットロイヤル」や「オータムキング」の面積が、5年間で大きく増加している(第1表)。

第1図 生鮮ぶどうの輸入量の推移



資料 財務省「貿易統計」

第1表 カルフォルニア州の生鮮ぶどうの品種別、結果樹面積(上位5品種)

	12年	17年	17年/ 12年比
1 フレーム シードレス (Flame Seedless)	7,380	6,003	-18.7
2 クリムゾン シードレス (Crimson Seedless)	5,232	3,363	-35.7
3 スカーレット ロイヤル (Scarlet Royal)	1,017	2,733	168.7
4 レッドグローブ (Red Globe)	4,302	2,849	-33.8
5 オータムキング (Autumn King)	647	2,333	260.7
その他	13,391	15,827	18.2
合計	31,969	33,108	3.6

資料 USDA "CALIFORNIA Grape Acreage Report"

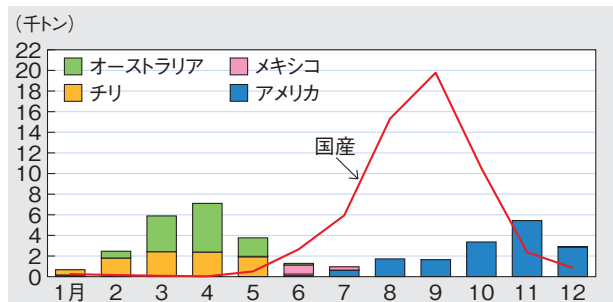
## 2 世帯主の年齢別の消費動向

両国からの輸入時期をみると、南半球に位置するオーストラリア産が上期(1~6月)で、北半球のアメリカ産は国産と競合する下期(7~12月)である(第2図)。

上期と下期の1世帯あたり月平均購入量を世帯主の年齢別に比較したのが第2表である。

まず下期の購入量を見ると、世帯主が49歳までの世帯は、60歳以上の2分の1程度と少なく、ぶどう消費はほかの果物と同様に高齢

第2図 月別の輸入量と国産の出回り量(2018年)



資料 輸入数量は財務省「貿易統計」、国産の出回り量は農林水産省「青果物卸売市場調査」の卸売数量  
(注) 18年の国産の出回り量は19年3月時点で未公表のため17年値を参考に作成。

**第2表 世帯主の年齢別ぶどうの1世帯あたり月平均購入量(2018年)**

(単位 g)

	上期(1~6月)	下期(7~12月)
~29歳	16	63
30~39	65	153
40~49	60	174
50~59	62	273
60~69	73	409
70~	69	427

資料 総務省「家計調査年報」

(注) 2人以上の世帯の全国平均値。

者層が牽引してきたことがわかる。

しかし輸入物が中心となる上期は、どの世代でも同程度の購入量となっている。データの制約から、国内消費を輸入と国産に分けて把握することは難しいが、上期の消費動向をみると、この時期の輸入ぶどうは幅広い世代で受け入れられている。

50歳以上世帯の年間購入量は10年前と比べて減少するなか、39歳までは5割以上増加しており(第3表)、若年層の消費拡大が輸入増加につながったと考えられる。

### 3 輸入の今後の見通し

19年以降の上期の輸入は、TPP11の発効に伴う関税の即時撤廃によって増加が予想される。19年1~2月の輸入量はチリ産が前年同期比で7割増加している。オーストラリア産は伸びていないものの、現在、日本政府と品種制限撤廃に関する協議を進めており、協議の行方によっては拡大の可能性はある。

また、輸入は国産の端境期が中心だったが、16年頃から下期のアメリカの輸入量も増加しつつある。

輸入会社によると、輸入は国産と比べて安価で、多くの世代から年間を通して一定の消費があることから、輸入国や品種を組み合わせる

**第3表 世帯主の年齢階級別ぶどうの1世帯あたり年間購入量**

(単位 g、%)

	10年	17年	17年/10年比
~29歳	382	604	58.1
30~39	967	1,454	50.4
40~49	1,348	1,512	12.2
50~59	2,054	1,727	-15.9
60~69	3,713	3,137	-15.5
70~	3,291	2,882	-12.4

資料 第2表に同じ

ことで通年での調達に取り組む意向である。

### 4 国内生産は新品種に期待

ぶどうの輸入量が急増するなか、国内の経営体はシャインマスカット等の高価格品種を生産することで消費者からの支持確保に取り組んできた。<sup>(注)</sup>

今後も輸入は増大が見込まれ、中長期的には通年流通が進むとみられるなかで、国産はより一層、付加価値を高めていく必要があるだろう。

例えば石川県の「ルビーロマン」に見られるような、高級品種の開発も重要と考える。当品種は巨峰の約2倍の大きさが特徴で、出回り量が少ないこと等から希少な品種として高値で販売されている。また島根、長野、山梨の行政や民間等でシャインマスカットを片親として交配した赤色の皮ごと食べられる品種の開発が進んでいる。赤系の大粒品種の生産は、夏の暑さで着色が難しいことから少なく、皮ごと食べられる品種(シャインマスカット(緑系)、ナガノパープル(黒系))に並ぶ赤系品種として期待が高まっている。出荷の本格化は20年以降と見込まれており、こうした新品種の生産への取組みが国産ぶどうの振興につながっていくものとして、注目していく必要がある。

(ふくだ あやの)

(注) 福田彩乃(2018)「顕著な変化が見られるぶどうの主要品種と輸入」『農中総研 調査と情報』7月号